

Title	メルヴィルの紀行文学にみるディアスポラの海
Sub Title	Melville's Travel Account Across the Ocean of Diaspora
Author	竹内, 美佳子(Takeuchi, Mikako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.71 (2019. 3) ,p.75- 95
JaLC DOI	
Abstract	<p>Herman Melville's multiculturalism has become a critical focus since the 1960s. Ahead of critics, African American novelists such as Wright and Ellison had perceived Melville's social consciousness in the 1940s. This essay explores the origin of Melville's impact on the African American mind in his autobiographical novel, Redburn (1849). In contrast to romantic portrayals of Liverpool in traditional travelogues, Melville renders the city with dismal realism. Redburn's voyage is overshadowed by the presence of a sailor who had served for Portuguese slavers. Entering port, Redburn notices a slave ship loaded with gold ore from the Coast of Guinea. Cotton ships from the American South also frequent the dock. He sees people starving to death in an alley lined with cotton warehouses, which exemplify the storage of profit generated by American slavery and British mercantilism. Facing the statuary of Lord Nelson in front of the Merchants' Exchange, Redburn is drawn to four naked figures in chain around the pedestal, which are emblematic of Nelson's victory in the Battle of Trafalgar. The manacled captives remind Redburn of African slaves in the market-place of Virginia and Carolina. Melville's perspective on the city</p> <p>Melville's Travel Account Across the Ocean of Diaspora 95 thus undermines the monumental history of imperialism on both shores of the Atlantic. The ship bound homeward to New York carries innumerable impoverished Irish immigrants. Melville's allusion to 18th-century slave narratives evokes the Middle Passage, which was beyond comparison with the immigrants' voyage to the American Dream. Redburn remarks in the home port : 'Down goes our old anchor, fathoms down into the free and independent Yankee mud.' This statement is not self-content nationalism, but a declaration of the</p>

	need for ceaseless transformation of the self into the ideal. With the hero's rigorous will to behold 'the real sight of this world,' Melville's travelogue confronts the modern era from its multiracial standpoint.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20190331-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メルヴィルの紀行文学にみる ディアスポラの海

竹内 美佳子

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-91) の多文化的創造力に注目する研究は、1960年代の公民権運動以降に本格化する。Edward Grejda と Carolyn Karcher の研究が代表的だが、批評家に先駆けて1940年代からメルヴィルの多文化的社会意識を洞察したのは、アフリカ系アメリカ人作家である。ライト (Richard Wright) は1946年の手稿に「メルヴィル、ソロー、ホイットマンは、自由の何たるかを表現する炎のごとき先駆者である」と記す (Fabre 107)。エリスン (Ralph Ellison) は、『白鯨』と『ハックルベリー・フィンの冒険』という19世紀アメリカの二大小説が、人間的平等の倫理を喚起したと1955年の論考に述べる (*Shadow and Act* 182)。現代アフリカ系アメリカ文学の開拓者であるライトとエリスンが、ともにメルヴィルを筆頭に挙げるのは注目に値する。本稿では、メルヴィルがアフリカ系アメリカ文学に与える影響力の原点を、初航海に基づく自伝的小説『レッドバーン』 (*Redburn: His First Voyage*, 1849年) に考察する。

文学の磁力

ニューヨークとリヴァプールを往還する初航海にメルヴィルが臨むのは、1839年のことである。その10年後、『レッドバーン』を執筆する作家は

困窮の底にあり、経済的事情から娯楽の作品を手がけたと明かす。「借金取りが自分を取り囲み、椅子の背後から覗き込んでベン先に取り憑き、インク壺に飛び込むような状況下に書いた作品」と、出版業者ダイキンク (Evert A. Duyckinck) 宛の手紙に述べるとおりである (1849年12月14日付, *Letters* 95)。しかし、義父レミュエル・ショー (Lemuel Shaw) に対しては窮状を告白しつつも、「作品には自分を抑えず思うがまま表現した」と明言する (1849年10月6日付, *Letters* 91-92)。紀行文学にメルヴィルが自制することなく主張した内容とは何か。

『レッドバーン』におけるメルヴィルほど敢然と現実を描いた作家はいない、とホーソーン (Nathaniel Hawthorne) は述べる (Matthiessen 188)。前作『マーディ』 (*Mardi and a Voyage Thither*, 1849年) においてメルヴィルは、マニフェスト・デスティニー「明白な天命」を掲げるアメリカの領土拡張主義を批判した。連邦下院議員、陸軍長官、副大統領、連邦上院議員、國務長官を歴任したナショナリストのカルフーン (John Caldwell Calhoun) を、残酷な奴隷支配者として描いたのである。南部を代表する奴隷制擁護論者の政治家を揶揄したことで、メルヴィルは、『サザン・クォーター』を始めとする南部の論壇から酷評を浴びた。「時が『マーディ』の借りを返すこともあろう」とメルヴィルは無念を表白する (Parker 634-35, 832)。『レッドバーン』を娯楽作品と韜晦しつつもメルヴィルは政治性を封印することなく、語りの奥に争点を炙り出す技法をもって舌鋒鋭く社会的発言を続けた。英米の奴隷制経済を繋ぐ大西洋航路に舞台を据えるメルヴィルの自伝的小説は、同時代に流行した海洋小説とは異なる社会意識を有する近代批判の書である。

『レッドバーン』執筆に至る作家の境涯を辿っておきたい。メルヴィルは、輸入貿易商にしてスコットランド貴族の子孫である父と、オランダ初期移民の子孫である母のもと、ニューヨークの名家に生まれた。父方の祖父トーマスは1773年、アメリカ植民地人が英国船を襲撃して茶箱を海に投棄する「ボストン茶会事件」の参画者である。トーマスは1775年、独立戦争初期の激戦となるバンカーヒルの戦いに加わり、少佐にまで上る革

命の志士だった。母方の祖父ピーター（Peter Gansevoort）は、独立戦争の将軍として名を馳せた。

メルヴィルは父が破産の末に早世したことから、12歳にして労苦を味わう。ニューヨーク州立銀行に勤めるも、銀行経営者や政治家の癒着を目の当たりにした少年は、職場を牢獄の如くに感じた。マンハッタンの波止場に育った爽快な記憶との落差には、失望を禁じえなかった。富裕階級の金銭取引は、物欲や利己心に対する問題意識に目覚める契機となった。海への憧れは止みがたく、メルヴィルは19歳にしてセント・ローレンス号にキャビンボーイとして乗り組む。アメリカ南部産の綿花を積み、32人の乗客とリヴァプールに向かう商船である。

メルヴィルの少年時代から『レッドバーン』執筆に至る時期は、海洋旅行記の全盛時代である。ヨーロッパの古城や寺院を探訪する旅行記の量産される時代に、メルヴィルは初航海に基づく小説を世に問うたのである。商船に乗り組む紳士階級の青年 Nathaniel Ames や Richard Henry Dana の旅行記が、1830年から40年にかけて出版市場で成功を取めたことは、アメリカに企業精神が勃興し、異国への冒険心が拡がる前兆だった（Gilman 170）。イギリス旅行記においてはリヴァプール到着が「定石的な場面」であり、このシーンを感動的に描くのが当時の常套手法であった（福岡42）。メルヴィルの『レッドバーン』は、海洋ロマンス的冒険譚とも航海日誌的記録文とも異なる、新しい視点を導入する。

リヴァプールの陰鬱この上ない描写は、メルヴィル自身の体験を多分に反映する。ウィリアム・ギルマンによれば、水夫は3分の1の前払金しか得られず、美術館などは入場料がかかるうえ外国人は紹介状を要するため、メルヴィルは都市の一面しか見ることができなかった。対照的に、裕福な出版業者の息子で後にメルヴィルと親交を結ぶエヴァート・ダイキンクは、全く同時期にヨーロッパ外遊からリヴァプールに立ち寄り、文化活動を満喫した。メルヴィルが船首楼内の水夫部屋に寝泊まりし、船員宿で食事を摂ったのに対し、ダイキンクは有名なアデルフィ・ホテルに滞在し

て見聞と交友を広めた。メルヴィルの散策といえば、波止場や証券取引所、税関のほかは、貧民街だったという (Gilman 137-38)。「リヴァプールの全風景と引き換えに、我が家の片隅が見たい」とメルヴィルが失望を故郷に書き送ったことは、母マリアが夫アランに綴る手紙に引用される (1839年9月25日付, Gilman 138, 335)。大貿易港の繁栄と極貧層の悲惨を見た衝撃が、近代世界と向き合うメルヴィルの原点となったことは疑いない。

零落した上流階級の子息である『レッドバーン』の主人公は、最年少の水夫として商船ハイランダー号に乗り組む身の上となる。レッドバーンは、自宅に飾られた優雅なガラス細工の船に憧れを募らせ、亡き父の渡航したイギリスの異国情緒を夢見る少年であった。兄の友人が「金持ちの息子」として手厚く船長に紹介したのが仇となり、レッドバーンは3ドルの前払金も受け取れない。金ボタン付きパンタルーンに鳥撃ち外套という装いを乗組員に失笑される彼は、「見られる客体」としての自意識と、粗野な水夫たちへの階級的優越感とに揺れ動く、悲哀に満ちた存在である。仕立屋に作らせた「最新流行」の狩猟服が海の務めに通用するはずもなく、晴れ着用のハイヒールブーツに至っては索具の昇降に不適格であり、日ごと塩水に縮んで窮屈きまわりない (72-74)。海員の職を一つ奪った新参として手荒に遇されるレッドバーンは、「地上最大の孤独で惨めな落魄者」と思いなされて、自己憐憫に嗚咽する (52)。そのナイーブな少年が厳しい航海を経るうちに、「自分はいかに好奇の目で見られても、力の限り目を見張る」と心に決め (201)、「見る主体」へと脱皮する。『レッドバーン』は、荒波に揉まれる主人公が社会観察者に成長してゆくビルドゥングスロマンと言えよう。世界に向かって見開くレッドバーンの目は、大西洋の現実を見据える作家メルヴィルの目でもある。

船上でレッドバーンがとりわけ興味を注ぐ航海機器は、羅針盤である。不動の正確さで北を指す針の神秘を、彼は飽かず見つめる。「世界の始めより移民の潮流は西に向かっているのだから、針はそちらを向きそうなものだが、永遠に北極を指している」(118)。羅針盤を載せる架台を「涼し

い夏の隠れ家」,あるいは「森の細道の奥に佇むあずまや」に見立てる彼は、自然の小宇宙を羅針盤にみる。レッドバーンの語りもまた、テキサス併合とメキシコ戦争に猛進する西漸運動のアメリカではなく、北極星を指して自由州とカナダに逃亡する奴隷の人間の自然と同じ磁力を帯びてゆく。メルヴィルが世界の中に措定するアメリカ像は、人種主義によって領土拡張と逃亡奴隷法を押し進める1850年よりも、啓蒙主義の名残を留める建国期の1800年に近い(Horsman 256)。異民族に寄せるメルヴィルの意識は、同時代アメリカを駆動するアングロサクソニズムと異なる多元性を有していた。

大西洋を描くメルヴィルは、アフリカ西岸と西インド諸島を結ぶ奴隷貿易航路を強く意識する。リヴァプール行きのハイランダー号に悪魔的存在感を及ぼすのが、^{ミドルパッセージ}中間航路の航海体験をもつジャクソンという名の船乗りである。まるで全世界が一個の人格となって自分に危害を加え、心臓を疼かせると考えているかのように、不穏な情動を抱えた人物である。陰鬱な狂気を秘めた人間として描かれるジャクソンが、『白鯨』のエイハブ船長に一脈通ずるのは、批評家の指摘するところである(Gilman 272-73, Bryant 67)。エイハブは、巨大な白鯨モービー・ディックに遭遇した時の致命傷ゆえ、全宇宙に作動する自分への悪意を意識してやまない。自分の足を食い千切った白鯨を標的にするエイハブの激情と異なり、ジャクソンの情念は源が定かでない。万物を蔑むジャクソンの姿に読み取れるのは、悪の巣窟としての海を知り抜いた心の闇である。

ポルトガルの奴隷船でアフリカから西インド諸島までの中間航路を航海した体験を、ジャクソンは悪魔のような邪気を込めて語る。奴隷を丸太のように積み込んだ船では毎朝、死者や窒息した者を足枷から外して間引きするのが日課だった。奴隷貿易のスクナーに乗った時は、ヴェルデ沖で駆逐艦に追跡され、鉄鎖に繋がれた奴隷の列を砲弾が直撃して殺戮するのを目の当たりにした。ジャクソンの厭世観は、人間の尊厳を破壊する奴隷貿易を海上に見続けたことと、無縁ではありえない。

ジャクソンは白人でありながら、『ベニート・セレーノ』(Benito Cereno, 1855年)に登場する奴隷暴動の首謀者バボを予示する人物である。2人の水夫が海の経験を競って口論になるとジャクソンは、「船乗りの年齢は歯を見れば、馬の年と同じくらいよく分かる」と言い放ち、両者の顔を覗き込む。ジャクソンに取り押さえられた水夫の姿に、レッドバーンは戦慄する。まるで殺気立つ床屋の手にかかった衰れな男が、喉を掻き切る合図を横目に、剃刀を宛がわれるのを待ち受けるかに見えたのだ。

I trembled for the poor fellow, just as if I had seen him under the hands of a crazy barber, making signs to cut his throat, and he all the while sitting stock still, with the lather on, to be shaved. For I watched Jackson's eye and saw it snapping, and a sort of going in and out, very quick, as if it were something like a forked tongue; and somehow, I felt as if he were longing to kill the man (60)

ジャクソンは実際に床屋を演ずるわけではなく、喉を切り裂く残忍な床屋像はレッドバーンの心象である。眼光に殺意を閃かすジャクソンの姿は、『ベニート・セレーノ』の奴隷船で床屋を務めるアフリカ人バボが、船長に切りつける場面を彷彿させる。剃刀を振りかざすジャクソンの幻影は、反乱奴隷バボの原型をなす。

歯の検分が奴隷売買の慣行であったことは、現代アフリカ系アメリカ文学にも語り継がれる事実である。たとえば、1940年代の深南部ルイジアナ州を舞台とするアーネスト・ゲインズの小説『ジェファソンの死』(Ernest Gaines, *A Lesson Before Dying*, 1993年)には、黒人学校を視察する白人教育長が児童の歯を検査する場面がある。教育長の振る舞いを見たアフリカ系の教師は、「新しい奴隷を購入する奴隷主が、家畜を買う時のように奴隷の歯を点検した」史実を思い出す(56)。『レッドバーン』におけるジャクソンの身振りは、白人水夫を黒人奴隷の立場に据え直し、人種を転倒

させる。メルヴィルはジャクソンの不穏な行為を通して、奴隷売買の悪行を揶揄したと解せよう。

アフリカ系の登場人物を描くメルヴィルの筆致は風趣に溢れる。セント・ローレンス号でメルヴィルが見習いとして手伝うコックと給仕はアフリカ系であり、人間的交流は人物造形のインスピレーションになったと考えられる。伝記作家のギルマンによればセント・ローレンス号の船員名簿から、登場人物のモデルと考えられる数名の船乗りが判明している。メルヴィルに食事を供した料理人は、ワシントン D. C. に住む Moses Walker, Jr. という黒人だった (Gilman 130)。『レッドバーン』の黒人コックはあらゆる食材を料理する腕前が医術に比せられ、船員仲間に「医者」と称される。しかも 5 平方フィート足らずの調理場で、彼は形而上学に没頭する。

All that Sunday morning, he [the black cook] sat over his boiling pots, reading out of a book which was very much soiled and covered with grease spots: for he kept it stuck into a little leather strap, nailed to the keg where he kept the fat skimmed off the water in which the salt beef was cooked. I could hardly believe my eyes when I found this book was the Bible. (81)

船がまだ埠頭に停泊していた時、3人のクエーカーらしき黒人牧師が調理場に入り、扉の中から朗読と説教に続いて賛美歌と祝禱が聞こえたのを、レッドバーンは思い出す。コックの調理場は思索に耽る「研究室」にして「礼拝堂」でもあるというわけだ。この敬虔なコックが、朝からコンロの火に大波が打ち寄せたりすれば、猛然と悪態をつく。荒海での料理は「忍耐強い〈ヨブ〉も痲癩を起こしかねない」難行なのである (82)。『レッドバーン』のコックは、『白鯨』に現れる黒人コックのフリースを予兆する。船側に群がる鯨の貪欲にフリースが甲板から浴びせる説教は、列強の海賊行為を戒めるかに聞こえる。『レッドバーン』の黒人コックは、綿花貿易

船にキリスト教徒の範を示す。メルヴィルは両作品のコックを、機知と諧謔に満ちた人物として活写する。

大西洋への挽歌

『レッドバーン』のリヴァプール場面は不穏に幕を開ける。入港に向かう主人公は、憂いに沈む大鐘の響きに驚く。

I was startled by the doleful, dismal sound of a great bell, whose slow intermitting tolling seemed in unison with the solemn roll of the billows. I thought I had never heard so boding a sound. [...] It was not in the direction of the shore; but seemed to come out of the vaults of the sea, and out of the mist and fog. (127)

誰が死んだのか、いったいどうしたのか、とレッドバーンは訝しむ。ゆっくりと断続的に鳴るその鐘は、荘厳な波濤の轟きと斉奏するかのようであり、これほど不吉な音を聴いたことは嘗てないと彼は思う。その響きは岸辺からではなく、海底の納骨堂から、靄と霧の中から立ち昇ってくるように聞こえた。メルヴィルがリヴァプールに打ち鳴らす大鐘は、水底に沈んだ魂を弔うように響き渡る。

大西洋を見つめるメルヴィルの視点は、アフリカ系アメリカ文学と共振する。ラルフ・エリソンは遺作『ジュンティーンズ』(Juneteenth, 1999年)の中で、奴隷船を大西洋に浮かぶ棺にたとえる。アメリカを象徴する同じキリスト教徒の船として、プリマス植民地を拓くピルグリム・ファーザーズのメイフラワー号に、奴隷船を対置するのだ(120)。リチャード・ライトはアフリカ旅行記『ブラック・パワー』(Black Power, 1954年)において、リヴァプールからゴールド・コースト(ガーナ)に向かう船上より、夕日に染まった大西洋を「罪業の海」として見つめた(391)。メルヴィル

は、近代列強の繁栄を象徴するリヴァプール港の鐘に「過去への挽歌の響き」を込める。綿花貿易船で初航海したメルヴィルは、奴隷貿易船と奴隷労働の産物とが航行する場として大西洋を見つめるのだ。

リヴァプールに降り立つレッドバーンが注視するのは、アフリカのギニア湾から来た改造奴隷船である。海賊めいた船員が金鉱を台車で運び出す艀口は、まるで地下墓か炭坑の入り口のように見える(175)。イギリスがアフリカ植民地の地下資源を収奪する現実を港で目撃する彼は、母国アメリカのジョージア・アラバマ綿花を積む船が入港するのも見逃さない(163)。レッドバーンが大貿易港で俯瞰するのは、アメリカへ強制移送したアフリカ人の奴隷労働による収穫物がイギリスに運び込まれる、三角貿易の還流である。繁栄の陰にあるリヴァプールの貧困は著しく、路地裏の地下に身を潜めた母子が餓死する奇怪な光景に、レッドバーンは遭遇する。母子の息絶えた道の両側には「牢獄のような綿花倉庫」が立ち並ぶ(180)。アメリカの奴隷制度とイギリスの重商主義がもたらす利益の集積場である。かくしてメルヴィルはリヴァプールの繁栄と極貧の背後から、アメリカ南部の綿花畑で酷使される奴隷の存在を浮かび上がらせる。

「自分は故国にいるのではない」とレッドバーンに意識させる最大の要因は、イギリスの人種的均一性である。貧民の住む区画をよく訪れる彼は、黒人の不在に強い印象を受ける。リヴァプールの町は皆が白人であり、アイルランド人を除いては土着の英国人であった。イギリスのような「土着の物乞い」がアメリカに見られないのは、黒人が最底辺で極貧を担っているからだとしてレッドバーンは気づく。「アメリカ市民として生まれたことが、貧困に陥らない保障になっているとみえる。おそらくは選挙権の所産なのであろう」(202)。主人公はアメリカの民主政治に、アフリカ系の市民権という観点から批判の目を向ける。

リヴァプールでアメリカ黒人水夫が自由に振る舞うのを見たレッドバーンは、この町の人種的寛容に驚く。そもそも、他民族の人間性を認める社会風土を奇異に感じるのは、自分がアメリカの人種偏見に囚われていたか

らだと彼は思い至る。「アメリカ人が自ら独立宣言の冒頭に掲げた原理を、他国の実践に委ねている」状況が、レッドバーンには嘆かわしい(202)。

メルヴィルは、イギリス人の人種の寛容を手放しで賞賛するわけではない。リヴァプール港の棧橋には民間商船員に向けた英国軍の告知が貼られ、インド、オーストラリア、カナダで自然の楽園に暮らすという幻想のもと、「女王陛下の海軍」に報奨金つきで兵を募っている(193)。レッドバーンの見た改造奴隷船が金を採掘するギニア湾地域も、イギリスの植民地である。リヴァプールには「アメリカと違って黒人に関する誇張された感情は存在しない」(202)と記しつつもメルヴィルは、アメリカの奴隷制度という国内植民地主義とは異なる、イギリスの海外帝国支配を作品の随所に指摘する。

レッドバーンが探訪の拠り所とするのは、30年以上前に父が用いた古色蒼然たる案内書である。父の遺品は現在の地理と一致しないのだが、彼はこれを手引きに父の足跡を巡礼する。チャペル・ストリートの回廊めいた空間が、レッドバーンの「ヤンキー魂を寺院や大聖堂のロマンチックな思いで満たした」次の瞬間、彼は商取引所の広場に立っている。父がここにいたという強烈な印象に打たれるレッドバーンは、自分が「駆け出して次の市庁舎を回った所で父に追いつく」のを感じる。主人公が不意に父と一体化するこの広場で見たものは、イギリス海軍力の象徴たるネルソン提督の彫像である。

周知のとおりネルソン(Horatio Nelson, 1758-1805)は、フランス革命政府に対するイギリスの開戦とともに、艦長として7年余りの対仏戦争に参加する。ナポレオン1世が、イギリスのインド支配に対抗する基地建設を目指してエジプトに上陸すると、ネルソンは「ナイルの戦い」でフランス艦隊に勝利した。ネルソンは1805年、フランス・スペイン連合艦隊をトラファルガルの戦いで全滅させた後に戦死する。この戦闘によりイギリスは世界最大の海軍力をもつ国家となって制海権を確保し、ネルソンは国家の英雄として不朽の名声を得た。レッドバーンの目を釘づけにするの

は、ネルソン像の象る勝者と俘囚の構図である。

大理石の台座に立つネルソン像は、一方の足をのた打ち回る敵に掛け、もう一方を大砲に載せ、勝利の中でまさに息絶えんとしている。台座の基部に鎖で繋がれ、屈辱と絶望の姿で坐る4体の裸像を、レッドバーンは熟視する。

Those woe-begone figures of captives are emblematic of Nelson's principal victories; but I never could look at their swarthy limbs and manacles, without being involuntarily reminded of four African slaves in the market-place.

And my thoughts would revert to Virginia and Carolina; and also to the historical fact, that the African slave-trade once constituted the principal commerce of Liverpool; and that the prosperity of the town was once supposed to have been indissolubly linked to its prosecution. (155)

俘囚の浅黒い身体と鉄の桎梏を見たレッドバーンは、かつてヴァージニアとカロライナの市場で目にした4人のアフリカ人奴隷に心を馳せる。リヴァプールの繁栄を支えた主要産業は奴隷交易であり、アメリカ南部のプランテーション経済がイギリス大貿易港と結んで発展した歴史が、レッドバーンの思念に鮮明化するのだ。ネルソン像の前で追憶するのは、奴隷制廃止論者としての父であり、さらには父の友人で、奴隷貿易批判の議会演説を行いリヴァプール選挙区の票を失ったイギリスの政治家ロスコー氏¹⁾である。レッドバーンの父は当時、ニューヨークの家を訪れる客人に、奴隷貿易廃止の議論に揺れるリヴァプールと、混乱に陥った貿易商の様子を語っていた。イギリスで奴隷貿易が禁止されるのは1807年、アメリカにおいては憲法第1条第9節の規定により1808年である。ここで主人公は19世紀初頭の社会事情を、父の面影に追憶していることになる。西漸運

動と産業革命の猛威で時代遅れになった人間精神に、30年後のレッドバーンが古地図を携えて「追いつく」という時間の転倒により、メルヴィルは啓蒙主義の名残を留める時代に読者の意識をいざなう。レッドバーンは、チャペル・ストリートを通るたび必ずネルソン群像を見に行くほど、支配者と俘囚の構図を心に焼きつける。

ギルロイ (Paul Gilroy) は『ブラック・アトランティック』にこう記す。「奴隷体験と密接な作家たちは、西洋文明の英雄的な物語を拒否し、その物語を根底から支える記念碑的な時間を掘り崩すために、哲学的知見をもって奴隷制に向き合っていた」(197)。デュボイス (W. E. B. Du Bois)、ダグラス (Frederick Douglass)、リチャード・ライトに向けたギルロイの言は、ネルソン像を捉えるメルヴィルの視座にも当てはまる。奴隷制度を象徴する綿花貿易船で初航海したメルヴィルは、大西洋を支配する西洋近代の間ではなく、西洋に収奪されたアフリカの民族離散^{ディアスポラ}の時間を可視化させる。

独立精神への航海

ナラティヴの背後に中間航路を顕現させるメルヴィルの技法は、リヴァプールからニューヨークへの復路にも駆使される。新天地アメリカを目指す500人のアイルランド人移民を乗せたハイランダー号の船旅は、疫病による死者を海に投下しながら苛酷を極める。ウィリアム・ギルマンの調査した1839年9月30日のニューヨーク税関記録によれば、メルヴィルを乗せたセント・ローレンス号は、リヴァプールで脱走した3名を除き、乗組員全員が無事に航海を終えた。往路の船荷はアメリカ南部の綿花であり、復路はイギリス製の鉄、銅、陶器、麻布を積んでいた。さらに1949年に国立公文書館で発見されたセント・ローレンス号の乗客名簿には、32人の乗客も全員ニューヨークへ帰着したと記録される (Gilman 134, 199-201)。500人もの飢えた移民を乗せた波乱の旅は、メルヴィルの全面的虚構であることが分かる。

アメリカ行きの移民集団を乗せた復路においてもメルヴィルは、赤道直下の中間航路を読者に幻視させる。船内では15人の特権階級が一等船室で贅を尽くす一方、500人の移民は光も通気もない密室に「綿花の梱のごとく格納され、奴隷船の奴隷のように詰め込まれている」(241)。貧しい移民の密集する三等船室を見たレッドバーンは、驚きを次のように記す。

The sight that greeted us, upon entering, was wretched indeed. It was like entering a crowded jail. From the rows of rude bunks, hundreds of meager, begrimed faces were turned upon us; while seated upon the chests, were scores of unshaven men, smoking tea-leaves, and creating a suffocating vapor. But this vapor was better than the native air of the place, which from almost unbelievable causes, was foetid in the extreme. (284)

レッドバーンを待ち受けていた光景は、混沌たる牢獄の様相だった。粗末な寝棚の列から数百のやつれて黒ずんだ顔がこちらを振り向き、辺りには息苦しい空気が立ち込めている。

メルヴィルの描く無数の黒ずんだ顔と窒息的状况は、アメリカ建国記に出版された奴隷体験記『アフリカ人、オラウダ・イクィアーノの生涯の興味深い物語』(*The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano or Gustavus Vassa, the African*, 1789年)の一端を連想させる。イクィアーノは、8歳の時にアフリカの奴隷狩りに連れ去られ、ギニア湾で奴隷船に乗せられた。船内の光景を見た幼い語り手は、自分の宿命を思い知る。

When I looked round the ship too and saw a large furnace or copper boiling, and a multitude of black people of every description chained together, every one of their countenances expressing dejection and sorrow, I no longer doubted of my fate; and, quite overpowered with

horror and anguish, I fell motionless on the deck and fainted. [...] I was soon put down under the decks, and there I received such a salutation in my nostrils as I had never experienced in my life. (Equiano 71–73)

船倉には巨大な竈^{かまど}が煮え滾り、夥しい黒人が打ち拉がれた姿で鎖に繋がれている。甲板下の窒息的空氣に息絶えた者もいる、と語り手は続ける。

イクィアーノの自伝は出版後 40 年間に 17 版を重ねる。航海記を多読したメルヴィルが、大西洋を渡るアフリカ人奴隷の体験記に無関心なはずはない。メルヴィルは一等船客の移民差別を問題にしながら、貨物として扱われるアフリカ人奴隷の航海を喚起し続ける。疫病の発生したハイランダー号では、毎日数人の死者をバラストに括り付けて大海原に投げ捨てる。6 日目には「さらに 5 人の黒ずんだ死体」を嵐の海に渡した、そうメルヴィルは記し、虐げられる民族に黒の表象を与える (289)。ネルソン像の俘虜に黒人奴隷を重ねた同じ技法で、メルヴィルは遺棄される民の身体に中間航路の悲惨を投影する。

飢えた移民が食料を求めて徘徊するのに対して船長は、「盗みを犯した移民は索具に縛りつけて鞭打ちの刑に処する」と言い渡す (284)。甲板上での鞭刑が奴隷船の常習であった事実は、奴隷体験記に明確である。オラウダ・イクィアーノは、食べ物を拒んだことから巻き上げ機^{ウィンドラス}に縛り上げられ、激しく鞭打たれる (Equiano 73–74)。奴隷はプランテーション経済の「動産」ゆえに、断食や投身の企てには厳罰が科せられた。メルヴィルはアメリカン・ドリームへの艱難に堪える移民を描きながら、比較を絶する奴隷の受難に意識を向ける。

奴隷貿易船に乗り組んだ経験をもつジャクソンは、アメリカ行きのハイランダー号上で実際に奴隷船の恐怖を惹起する。船長が移民全員を北アフリカのバーバリ海岸に連行し、奴隷として売り払う計画をもっていると、彼は移民集団に流布するのだ (260)。ジャクソンの途方もない作り話を信

じ込む乗客の悲鳴で、船は一時騒然となる。希望の「新世界」を目指す移民が、実はアフリカ行きの奴隷船に乗せられていたというディストピアは、貧しい移民の苦難をも瞬時に極小化してしまう。西洋人を奴隷船でアフリカへ連行するという逆転によって、ジャクソンは捕囚の恐怖を移民に知覚させる。かくて『レッドバーン』は、アフリカ人の奴隷体験記を読者の脳裡に照射しながら、大西洋を往還する。

リヴァプールからニューヨーク港に帰着するレッドバーンは、初航海を遂げた感懐をこう記す。「ついに我らの良き錨が、自由で独立した Yankee の泥深くに下りてゆく。その泥の一握りには、今やイギリスの大莊園ほどの価値がある」(301)。イギリスからの文化的独立に向かうアメリカ文芸復興の気運を体現するような感懐である。アメリカは「国家というよりは世界なのだ」とレッドバーンは述べる。「私たちはすべての時代の遺産継承者であり、すべての国の民と遺産を分かちあう者である。このウエスタン・ヘミスフィアウエスタン・ヘミスフィア西半球では、すべての種族と人民が一つの連合した全体を形成しつつあり、アダムの疎外された子孫が、エデンの古き炉辺に戻る未来がくるはずなのだ」(169)。この一節を捉えて『レッドバーン』をメルヴィル初期のナショナリズム、あるいはコスモポリタン・アメリカニズムの典型とみなす批評もある。若きメルヴィルの愛国的情熱が、最後の長編『信用詐欺師』(*The Confidence-Man: His Masquerade*, 1858年)の懐疑に変わるという解釈である(Hickman 276-79)。あらゆる民族からなるアメリカ人は全世界を包含するというレッドバーンの考え方には、「新世界」アメリカの高揚が確かに窺える。しかし、主人公がここに称揚するアメリカは、「いずれそう成るべき」民族共生圏の未来像にほかならない。

アメリカに根差す作家メルヴィルの意志表明とも響く主人公の言葉は、自己充足的な愛国主義とは異質である。メルヴィルは、変容し続ける存在の理想像を、航海者の姿に思い描く。「船乗りは今ここにいるかと思えば、次はあそこにいる。常に自己を変転してやまず、変転のなかにも変転してゆく」(They are here and then they are there; ever shifting themselves, they shift among

the shifting.) (309) 絶えず脱皮して何者かに成りゆく存在のあり方は、レッドバーンの考える理想の社会像に重なる。

上陸するレッドバーンは給金を得るところか、金槌3個と搔器2個を海に放り投げた罪で、逆に弁済を求められる。支払いを迫る船長は、少年が誇りにする上院議員の大伯父を引き合いに出し、「君の大伯父は床屋だったな」と皮肉を込めて問う(306)。6年後に出版される『ベニート・セレーノ』のアフリカ人奴隷バボーが、レッドバーンに憑依する瞬間と言えよう。独立精神を培うレッドバーンの初航海が、既成社会に対する転覆性をもつことを、刃閃かす「床屋の末裔」としての主人公像は象徴する。

メルヴィルが多感な幼少期からアフリカ系文化に親しんだことは、ハーシェル・パーカーやウィリアム・ギルマンのメルヴィル伝には窺い知れないが、21世紀に入り、歴史学者の多文化研究によって脚光が当てられた。メルヴィルの生まれたパール・ストリート6番地の家は、海を望むマンハッタンの先端に位置し、波止場に向かう奴隷たちが、歌や踊りで通行人を興じさせていた。メルヴィルの育つコートランド55番地はニューヨーク市庁舎からほど近く、公有広場は2万人の眠る黒人墓地を一角に擁するアフリカ系アメリカ人の聖地でもあった。

とりわけ1827年7月5日に催されたニューヨーク州奴隷解放のパレードでは、市庁舎からバッテリー・パークに至るブロードウェイを、4千人にのぼる黒人が楽隊と練り歩いた²⁾。8歳になるメルヴィルも沿道に立ち、祝典を見守ったと考えられる。パレードには、アフリカから捕囚となって中間航路を渡った奴隷の第一世代が数多くおり、後にメルヴィルの船員仲間となるアフリカ系海運協会も参加者に含まれていた。キャサリン・マーケットは、ロングアイランドやニュージャージーから黒人芸術家の集まる文化の中心地であり、ダンスの稽古をしていた少年時代のメルヴィルが、アフリカ系の舞踏様式に魅了されたのは想像に難くない(Stuckey 21-29)。トランペット奏者でもある作家ラルフ・エリスンは、『白鯨』にジャズ魂が横溢すると評する(*Trading Twelves* 170)。メルヴィルの多文化的な人間形

成を、エリソンは直観したと言えよう。

帰国する主人公にメルヴィルの語らしめる文明批判は、社会の周縁に抑圧された人間存在と一体になる。

We may have civilized bodies and yet barbarous souls. We are blind to the real sights of this world; deaf to its voice; and dead to its death. And not till we know, that one grief outweighs ten thousand joys, will we become what Christianity is striving to make us. (293)

依然として野蛮な状態にある近代人の精神は、世界の本当の姿が見えず、その声には聞く耳をもたず、その死には死んだ感覚しかもち合わせていない。たった一つの悲しみが一万の喜びより重いことを知るまで、自分たちがキリスト教の説くような人間になることはないのだ、とレッドバーンは旅の終りに語る。「見えない存在を見よ」(“Behold the Seen Unseen / Behold the Invisible”)というラルフ・エリソンの箴言を想起したい(*Invisible Man* 496)。初航海を遂げたレッドバーンの近代批判は、「他者」への想像力を希求するアフリカ系アメリカ人作家の叫びと通底する。

メルヴィルの初航海した1839年から『レッドバーン』出版に至る10年間に、アメリカは「明白な天命」を標榜して西部への領土拡張を加速させた。テキサス併合、オレゴン併合、メキシコ戦争、逃亡奴隷法を推進する膨張主義の時代にあって、メルヴィル文学の磁力は、西へと雪崩を打つアメリカに人間的自然を指し示す。『レッドバーン』は異国への冒険譚である以上に、冷徹なリアリズム小説である。文明社会に潜む真実を洞察する目は、メルヴィルが人種を超えて及ぼす力の源泉である。

Notes

- 1) メルヴィルが、実在の下院議員 William Roscoe (1753–1831) を示唆するのは明白である。ロスコーは1807年2月23日に英国議会で次のように述

べ、奴隷貿易廃止法案に賛成票を投じた。“I have long resided in the town of Liverpool; for 30 years I have never ceased to condemn this inhuman traffic; and I consider it the greatest happiness of my existence to lift up my voice on this occasion against it, with the friends of justice and humanity.” *The parliamentary debates from the year 1803 to the present time*. London: Great Britain Parliament. Published under the superintendence of T. C. Hansard, 1812–1820. Vol. 8 (1806–1807), col. 962.

- 2) ニューヨーク州議会は1799年7月4日に段階的奴隷解放令を制定。州憲法会議は1827年7月4日、奴隷制度を公式に廃止した。David N. Gellman, *Emancipating New York: The Politics of Slavery and Freedom 1777–1827*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2006. 153–219.

Works Cited

- Bryant, John. “*Moby-Dick* as Revolution.” *The Cambridge Companion to Herman Melville*. Ed. Robert S. Levine. Cambridge: Cambridge University Press, 1998. 65–90.
- Ellison, Ralph. *Invisible Man*. 1952. New York: Random House, 1995.
- . *Juneteenth*. 1999. New York: Random House, 2000.
- . *Shadow and Act*. 1964. New York: Random House, 1995.
- . *Trading Twelves: The Selected Letters of Ralph Ellison and Albert Murray*. Ed. Albert Murray and John F. Callahan. New York: Random House, 2000.
- Equiano, Olaudah. *The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano or Gustavus Vassa, the African*. Volume 1. 1789. New York: Cambridge University Press, 2013.
- Fabre, Michel. *Richard Wright: Books and Writers*. Jackson: University Press of Mississippi, 1990.
- Gaines, Ernest J. *A Lesson Before Dying*. 1993. New York: Alfred A. Knopf, 2011.
- Gilman, William H. *Melville’s Early Life and Redburn*. New York: New York University Press, 1951.
- Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1993.
- Grejda, Edward S. *The Common Continent of Men: Racial Equality in the Writings of Herman Melville*. Port Washington: Kennikat Press, 1974.
- Hickman, Jared. “On the Redundancy of ‘Transnational American Studies.’” *The Oxford Handbook of Nineteenth-Century American Literature*. Ed. Russ Castronovo. New York: Oxford University Press, 2012. 269–88.

- Horsman, Reginald. *Race and Manifest Destiny: The Origins of American Racial Anglo-Saxonism*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1981.
- Karcher, Carolyn L. *Shadow over the Promised Land: Slavery, Race, and Violence in Melville's America*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1980.
- Matthiessen, Francis Otto. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.
- Melville, Herman. *Redburn: His First Voyage*. 1849. Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1969.
- . *The Letters of Herman Melville*. Ed. Merrell R. Davis and William H. Gilman. New Haven: Yale University Press, 1960.
- Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography: Volume 1, 1819–1851*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1996.
- Stuckey, Sterling. *African Culture and Melville's Art: The Creative Process in Benito Cereno and Moby-Dick*. New York: Oxford University Press, 2009.
- Wright, Richard. *Black Power: A Record of Reactions in a Land of Pathos*. 1954. New York: HaperCollins, 1995.
- 福岡和子 『変貌するテキスト——メルヴィルの小説』 英宝社, 1995年

Synopsis

Melville's Travel Account Across the Ocean of Diaspora

Mikako Takeuchi

Herman Melville's multiculturalism has become a critical focus since the 1960s. Ahead of critics, African American novelists such as Wright and Ellison had perceived Melville's social consciousness in the 1940s. This essay explores the origin of Melville's impact on the African American mind in his autobiographical novel, *Redburn* (1849).

In contrast to romantic portrayals of Liverpool in traditional travelogues, Melville renders the city with dismal realism. Redburn's voyage is overshadowed by the presence of a sailor who had served for Portuguese slavers. Entering port, Redburn notices a slave ship loaded with gold ore from the Coast of Guinea. Cotton ships from the American South also frequent the dock. He sees people starving to death in an alley lined with cotton warehouses, which exemplify the storage of profit generated by American slavery and British mercantilism.

Facing the statuary of Lord Nelson in front of the Merchants' Exchange, Redburn is drawn to four naked figures in chain around the pedestal, which are emblematic of Nelson's victory in the Battle of Trafalgar. The manacled captives remind Redburn of African slaves in the market-place of Virginia and Carolina. Melville's perspective on the city

thus undermines the monumental history of imperialism on both shores of the Atlantic.

The ship bound homeward to New York carries innumerable impoverished Irish immigrants. Melville's allusion to 18th-century slave narratives evokes the Middle Passage, which was beyond comparison with the immigrants' voyage to the American Dream. Redburn remarks in the home port: "Down goes our old anchor, fathoms down into the free and independent Yankee mud." This statement is not self-content nationalism, but a declaration of the need for ceaseless transformation of the self into the ideal. With the hero's rigorous will to behold "the real sight of this world," Melville's travelogue confronts the modern era from its multiracial standpoint.